

## 中学2年生

# 「生命と環境」

## 見つめ直そうわたしたちの生活—循環と共生を求めて—

三 島 徹・鈴木 善 晴  
加 藤 容 子・藤 田 高 弘  
渡 邊 武 志

【抄録】 現代の人類が避けて通ることのできない「生命と環境」の問題を、身近な所から見つめ直し、その原因と対策・そして個々の人間としてのあり方を探る。身近な問題から普遍的問題へ、そして再び自己の問題として帰結させ、「生きる」力へと関連づけることを試みた。

【キーワード】 生命と環境・循環と共生 フィールドワーク 依頼状 お礼状 インターネット利用 教科との連携 行事との連携

### 1 はじめに

#### (1) 学年のテーマと目標について

当該学年に配当されているメインテーマは「生命と環境」である。このメインテーマをもとに学習活動を展開するにあたり、次のような事柄の実現を目標に掲げることとした。

- ①学習主体となる生徒自身が、身近な問題として主体的に取り組むこと。
- ②総合人間科のねらいのひとつである、教科でとらえきれない、しかも私たちが生きていく上で避けることが出来ない社会的、構造的課題を総合的に追求すること。
- ③自ら学ぶ意欲、自分で行動する力、自分の人生を自覚的に選択する力を養成すること。

これらの実践のためには、より身近で具体的な問題を見逃すことなく、それらを受け止め追求し、さまざまな事柄について自ら判断し行動する態度を養う機会を繰り返し体験するほかはない。また、生徒自身のより発展的な変革を期待して設定されている「生き方を探る」という中学1年時の学習成果を引き継ぎ、より具体的に課題を追求し、より実践的に行動する態度を養うことも欠かせないと考えた。

#### (2) サブテーマの設定について

見つめ直そうわたしたちの生活  
—環境と共生を求めて—

折しも、本校所在地である名古屋市を中心としたゴミ問題、藤前干潟や海上の森の保全問題など、時

宜を得た社会問題が生徒自身の身近な問題として認識されやすいという実情があったことは幸いであった。この実情を逃すことなく、以下のような観点からサブテーマを設定し、生徒の学習活動の指針を明確に示すこととした。

- ①生命と環境に関する諸問題を「環境と共生」という視点からとらえ、わたしたちの生活を再認識させ、日常の生活行動にも反映されるようにする。
- ②生活に身近なゴミ問題を通して、生命と環境に関わる諸問題を自ら発見し、問題点を調査し、深め、日常の生活行動にも学習の成果が結びつくようにする。

これらの観点は、社会問題としての環境問題としてだけでなく、名古屋大学のゴミ処理への本格的な取り組み開始という機会をも利用して、学校生活を含めた身近な環境問題を考え、原因や問題の広がり、さらには対処の方法を具体的に考え行動していくというものである。言い換えれば、身近な問題から社会的な問題、そして再び自己の姿勢や行動のあり方へ帰結するという、学習そのものを地に足のついたものにすることを念頭に置いたものである。

このことは、総合人間科の学習活動を通じて学んだこと（「生命と環境」）が、自覚的に自分の行動を選択して生きること（「見つめ直そうわたしたちの生活」）につながることを実感させることにより、調査や体験を通じて身につけた学習内容（総合人間科の学習）が、実際の生活行動に反映され、よりよい「生き方」に役立つものであることを体感させることにより、学ぶ意欲の発揚にもつながると考えた。

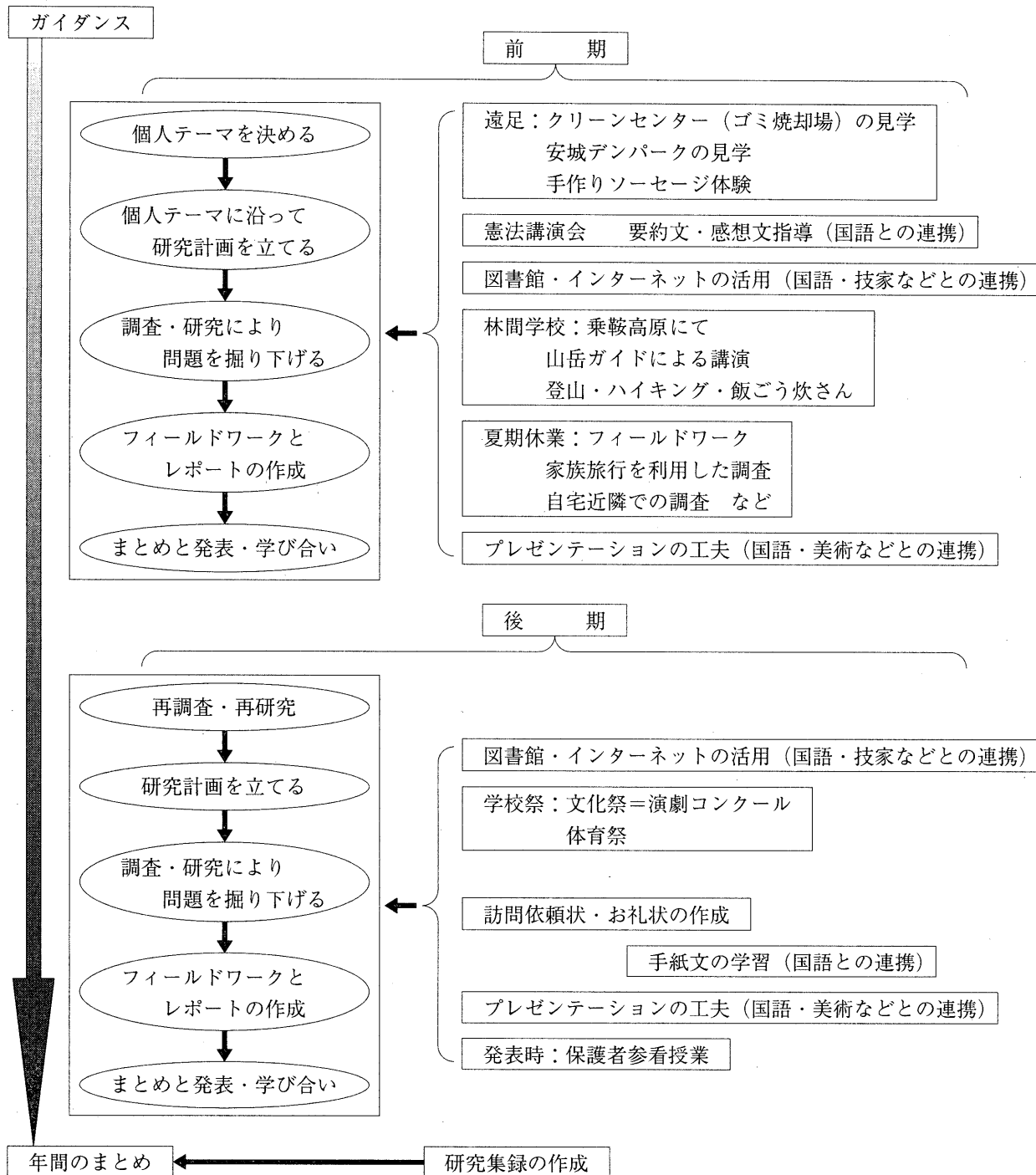
## 2 学習の方法と指導の体制について

### (1) 学習の方法と主な流れについて

学習活動は、隔週土曜日に設定されている総合人間科の時間だけに限らず、各種学校行事や教科学習との関連づけ、また長期休業を利用した生徒個人の取り組みなど、総合人間科以外のあらゆる機会をも積極的に活用することとした。

学習そのものの流れとしては、4月当初のガイダンスをスタートに、個人の研究テーマの設定、そして遠足や林間学校を関連づけながら、夏期休業中を利用したフィールドワークとそのまとめ、発表を前半とし、ついで、前半の研究内容をさらに深める後半の活動へと進めることとした。主な流れは以下の通りである。

#### ①学習の主な流れ



②総合人間科以外の活動との関連について

ア 遠足との関連づけ

遠足はクリーンセンター（ゴミ焼却場）の見学と安城デンパークの見学を実施した。

クリーンセンターでは、安城市を中心とした地域のゴミの状況やその処理方法について施設の係員による講義を受け、焼却施設の見学をした。生徒からは、ゴミ焼却にともなう排煙の環境への影響や最終処理についてなど活発な質問が出されていた。また焼却施設の見学については、巨大なクレーンによるゴミ処理の現場を目の当たりにした驚きの声があがっていた。多くの生徒は、小学校での社会見学で地域の処理場をたずねているのであるが、中学生としての知識や意識で見る現実、小学校時のそれとは受け止め方も異なる様子で、実施前には「また焼却場に行くのか」と不満げであったものも、感動を新たにしていた様子である。

安城デンパークでは、昼食の時間と場所の確保をかねて公園内の農場やガーデン、見本農園を散策し、昼食後、手作りソーセージの体験をした。添加物などを一切使わずに作り上げるソーセージ作りの体験は、グループ内での協力の大切さといった集団行動におけるあり方の指導と共に、健康や環境について考え、体験するもうひとつの切り口を与えることができた。

イ 憲法講演会との関連づけ

ウ 林間学校との関連づけ

林間学校は夏期休業開始直後に、乗鞍高原にて2泊3日の日程で実施された。初日の夜、宿舎に山岳ガイドを招いての講演は、自然のすばらしさと恐ろしさ、そして弱さなどについて、講演者の実体験にユーモアを交えて語っていただき、生徒は引き込まれるように聞き入っていた。翌日は、講演者として招いたガイドによる引率と説明によって乗鞍岳に登山し、雄大な自然とその大切さを実感した。

エ 教科との関連づけ

図書館やインターネットの利用、フィールドワークのポイントや事後の依頼状・礼状の書き方など、教科での学習事項に関連するものについては、教科と連携をとり、関係教科の学習計画の中に関連づけた。

オ 学校祭との関連づけ

学校祭の内、文化祭での中学生の主な取り組み

は演劇コンクールである。各クラスが趣向を凝らしての演劇を発表するが、大道具・小道具の制作など、計画時から事後の処理の仕方をも考慮に入れ、発表後にいわゆるゴミをできるだけ出さない、あるいはリサイクルを念頭に老いた計画を立てることとした。

(2) 指導の体制について

指導に当たっては、その学習や作業の性質により、類似の個人テーマによって分けたグループ別活動と、クラス単位や学年全体による一斉活動とを随時採用することとした。このことは、たとえばグループ別活動では、テーマに沿って調査やまとめをする際に、類似のテーマを持つ者同士が意見交換や情報の交換をする方がより効果的であること、また総合人間科の学習の目標のひとつでもある学び合いの機会を日常化する上でも便利であるからである。一方、一斉活動は発表などの場合に、自分と異なるテーマを追求した仲間の発表を広く受け入れることは、集団としての相互理解を深め、自分と異なる興味や関心を持つ存在を知る貴重な機会となる。このような、それぞれの特性を随時活用する柔軟性を持たせた体制を考慮した。したがって、担当教官は、グループ別活動においてはそれぞれ一人ずつの指導教官制をとり、一斉活動においてはその活動内容に応じて全員が何らかの形でチームティーチングの体制をとるよう計画した。

### 3 指導過程について

4月15日（土）の第1回から12月12日（土）の第17回までの具体的な活動は以下の通りである。  
（1・2月の活動については研究集録原稿の準備などにあてたので割愛した。）

第1回 4月15日（土）3・4限 学年一斉活動（於：小体育館）

「1年間の総合人間科の流れとテーマの説明」

- 1) 演劇とクイズにより、日常生活からでるゴミの分別とゴミ問題を考える。  
※保護者の参観により、活動の理解を得る。

第2回 5月6日（土）3・4限

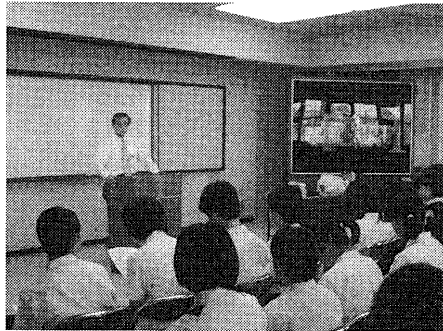
「ガイダンスとテーマ探し」

3限 学年一斉活動（於：図書館）

- 1) テーマ探しに役立つミニレクチャー
  - ①遠足で訪問するクリーンセンターについて
  - ②カメの話から生命の循環へ
- 2) 昨年度並びに過去の研究内容の紹介
  - ①昨年度の中2の研究から
  - ②高校1年生の研究から

4限 仮グループ別活動

- 1) 研究テーマ探して注意すること（説明）
- 2) ミニレクチャーで印象に残った内容のまとめ
- 3) 個人テーマ探し



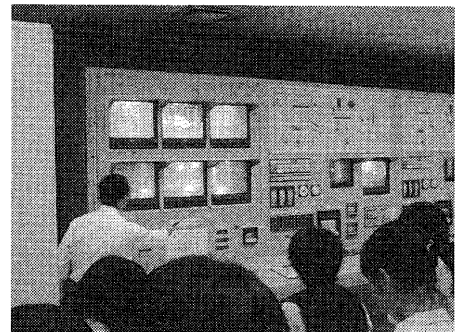
遠足で焼却場で説明を聞く様子

（この間に遠足実施）

第3回 5月20日（土）3・4限 クラス別活動

「個人テーマ探し」

- 1) 個人テーマ探しの継続と個人テーマの提出用プリントの作成
- 2) インターネットを利用した調査  
（クラス毎にインターネットの利用が可能になるよう時間を設定）
- 3) 調べた内容のまとめと報告書の提出



遠足で焼却場制御室見学の様子

第4回 6月3日（土）3・4限 クラス別活動

「夏のフィールドワークについて」

- 1) 夏のフィールドワークについての説明
- 2) インターネットを利用した調査  
（クラス毎にインターネットの利用が可能になるよう時間を設定）
- 3) 調べた内容のまとめと報告書の提出
- 4) 夏のフィールドワーク計画書作成



遠足で手作りソーセージ体験の様子

第5回 6月17日（土）3・4限 グループ別活動

「夏のフィールドワークについて」

- 1) （クラス毎に）夏のフィールドワーク計画立案についての諸注意事項とグループ分けの発

- 2) (グループ毎に) 自分の研究間の発表  
(フィールドワーク先や研究目標についての発表と質疑応答・助言)
- 3) フィールドワーク先の決定と計画書の作成

第6回 7月1日(土) 3・4限

「夏のフィールドワークについて」グループ別活動

- 1) フィールドワーク先の決定と計画書の提出
- 2) 各自の研究テーマに沿って調査  
(グループ別にインターネットの利用が可能になるよう時間を設定)

(夏期休業中、林間学校、夏のフィールドワーク実施)

第7回 9月2日(土)

「林間の礼状作成とフィールドワークのまとめ」

3限 クラス一斉活動

林間学校のお礼状作成(林間学校活動班ごと)

4限 グループ別活動

- 1) 各自の夏のフィールドワークのレポート完成
- 2) 発表の準備



林間学校の様子

第8回 9月16日(土) 3・4限 グループ別活動

「学校祭用パネル準備とフィールドワークのまとめ」

- 1) 学校祭用総合人間科パネル個人研究テーマ表の作成
- 2) 夏のフィールドワークのレポート完成と発表の準備

(この間に学校祭実施)

第9回 9月30日(土) 3・4限 グループ別活動

「夏のフィールドワーク発表会」

- 1) 一人あたり5～8分程度で発表  
(11月のフィールドワークへの発展と個人研究への深化を中心に発表)
- 2) 質疑応答

第10回 10月7日(土) 3・4限 グループ別活動

「夏のフィールドワーク発表会」

- 1) 一人あたり5～8分程度で発表(前回の続き)  
(11月のフィールドワークへの発展と個人研究への深化を中心に発表)
- 2) 質疑応答
- 3) 11月のフィールドワーク計画の作成

第11回 10月21日(土) 3・4限 グループ別活動

「11月のフィールドワーク計画立案」

1) 11月のフィールドワーク先の調査頼

2) 訪問依頼状・質問状の作成

※この期間に合わせて、国語の授業（表現の手紙の書き方）で質問状・依頼状などの書き方を指導。

第12回 11月4日（土）3・4限 学年一斉活動（於：図書館）

「フィールドワーク実践講座」

1) 教育学部的場先生による講演

2) フィールドワーク当日のタイムテーブル表の完成とフィールドワークノートの作成

第13回 11月16日（木）全日

「フィールドワークの実施」

1) 各自でフィールドワーク先に出かけて調査

2) フィールドワークのまとめ

第14回 11月18日（土）3・4限 グループ別活動

「フィールドワークのまとめと発表準備」

1) フィールドワークのお礼状書きと発表準備

2) フィールドワークのレポート作成

第15回 12月7日（木）2・5限 クラス別活動

「フィールドワーク発表会①」

1) 保護者も参加し、フィールドワークの発表会  
（一人あたり5分程度の発表と質疑応答）

第16回 12月14日（木）5・5限 クラス別活動

「フィールドワーク発表会②」

1) 保護者も参加し、フィールドワークの発表会  
（一人あたり5分程度の発表と質疑応答）

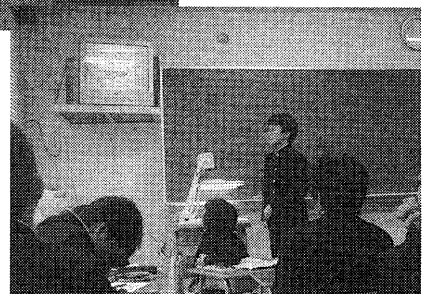
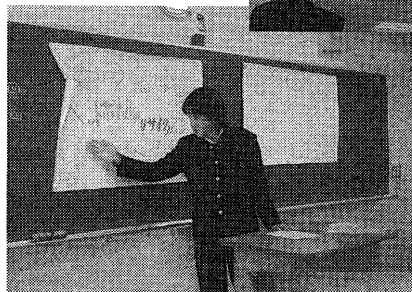
第17回 12月16日（土）3限 グループ別活動

「フィールドワークレポートの完成」

1) フィールドワークのレポート作成と提出



発表の様子



#### 4 個人テーマと主な訪問先

個 人 テ ー マ	主 な 訪 問 先
森の大切さ	中部森林管理局名古屋分局
水とアザラシ	南知多ビーチランド 愛知県庁水環境課 名古屋港水族館
電化製品の生産とリサイクル	日立製作所株式会社中部支社新事推 三菱電機株式会社名古屋製作所

環境によい車とは	TOYOTA博物館
文具用品ができてから捨てられるまで	株式会社パイロットインキ 栗本商会総務経理部
干潟の浄化作用と汚水の影響 ー干潟の必要性ー	藤前干潟 名城大学
ダイオキシン	豊田市枝下 大江川の工場 愛知県環境政策課
生活廃水が川に及ぼす影響	中部大学木曾川治水研究室 植田下水処理場 中部大学
あふれるプラスチック	日本海・太平洋沿岸の浜と磯 名古屋港水族館 日本コーンスターチ名古屋本社
リサイクル ーペットボトルー	リサイクル推進センター
ゴミの分別とダイオキシン	家の近くの道・交差点 昭和区環境事業所 ジャスコシティ八事
ゴミ・動物 ー互いのつながりー	東山動物園(動物会館) 名古屋大学生命農学研究科
シックハウス	春日井ハウジングセンター 相山学園大学 金城学院大学
ゴミの循環と自分たちへの影響	40日間自分が出すゴミの調査 鳴海下水処理場 東部クリーンセンター
下水と生活	中部大学木曾川治水研究室 名城下水処理場
酸性雨と大気汚染	公害総合センター 名古屋市環境科学研究所
川の汚れとホタルを中心とした河の生き物	荒子川・庄内川 ビオトープ
食品添加物の必要性	アニュー川名店 相山女学園大学生生活科学部食品栄養学科 第一化成株式会社名古屋営業所
食品保存料	生協 愛知県衛生研究所化学部
国産食品と輸入食品 ーどちらを利用すべきかー	愛肉連
食品添加物	名古屋市消費生活センター 名古屋検疫所 金城学院大学家政学部
食品添加物が人間に及ぼす影響	アニュー川名店 あいち生協本部笠寺センター 名古屋市役所食品衛生課
鶏卵の危険性について	名古屋市農業センター 高濱養鶏場
絶滅危機のメダカ	東山動物園メダカ館 愛知県自然環境課 建設省中部技術事務所技術課
愛知万博	中京女子大学
長生きのひけつ	デイサービスセンター 国立長寿医療研究センター
食品添加物について	名古屋市消費生活センター 丸善製薬 三栄源F F I (株)
ダイエット	飯田市立病院 ビューティメイト星が丘 名古屋大学教育学部 千種スポーツセンター
新しい農業と伝統農業	金井農園 名城大学農学部生物資源科 愛知県農業総合試験場
添加物と甘味料の光と影	中京コカコーラボトリング 愛知県衛生研究所生活化学科
私たちが必要としている食物とは	近くのスーパー・コンビニ 愛知県衛生研究所生活化学科 日清食品株式会社名古屋支店
味覚	うどん食べ歩き調査 イチビキ株式会社
エイズ ー今わたしたちにできることー	愛知県庁健康福祉部健康対策課
見つめ直して人権問題 ーなぜ人は人を傷つけるのー	名大教育学部心理相談室 名大教育学部心理相談室

視力	キクチ眼鏡専門学校 名大医学部附属病院眼科 名古屋市総合リハビリテーションセンター
人と植物は共生していけるのか	緑化センター 東山植物園事務局農学国際教育協力研究センター
注意欠陥多動性障害	南部地域療育センター
生活習慣病の恐怖	永井先生宅 林小児科内科医院 天白保健所
児童虐待	児童相談所（八事の家） 南部法律事務所
少年犯罪 ―犯罪を起こす人達の心理―	名大教育学部丹下先生 アイ・メンタルクリニック
花粉症	名古屋大学附属病院
たばこ ―害とその心理―	愛知県がんセンター
犯罪少年少女の心理と社会の見方・生き様	名古屋家庭裁判所 名古屋大学教育学部
水道水は安全か	名古屋市水道局（水道管理課） 鍋屋上野浄水場
外来の動植物と日本の動植物	琵琶湖博物館 名古屋大学農学部
捨て犬・捨て猫	名古屋動物愛護センター 天白保健所
映像心理学	小谷眼科 NHK放送局 メニコン 名古屋大学教育学部心理学科
顔について ―感情と表情―	名古屋大学教育学部
少年事件	警察の少年課 名古屋大学教育学部
薬 ―薬が体に及ぼす影響―	名古屋薬剤師会・薬理情報部 帝国臓器製薬株式会社
医療不信 ―保険診療と患者の負担―	塚田さんの宅 名古屋市役所
骨と筋肉	皿貝接骨院 名大総合保健体育センター
たばこ ―なぜこの世界からなくならないのか	日本たばこ産業株式会社名古屋支店
スポーツとけが	セントラルフィットネスクラブ 名大総合保健体育センター
癌との付き合い方とホスピスのあり方	T先生へのインタビュー 愛知国際病院
農業について	金井農園 愛知県総合試験場作物研究室環境研究室
心理学―癒しと環境―	警察犯罪被害者対策室 被害者サポートセンター愛知 名古屋大学教育学部
農薬	武田薬品工業（株） 名古屋大学農学部生物機能分化学講座 アグロカンパニー
睡眠	名古屋市科学館 睡眠館オーガニック 愛知健康の森
心理学 ―癒しと環境―	警察総犯罪被害者対策室 被害者サポートセンター愛知 名古屋大学教育学部
薬害 ―薬が起す害―	アズウェル名古屋店 名古屋薬剤師会・薬理情報部 帝国臓器製薬株式会社
薬がもたらす体への影響	内藤記念くすり博物館 名古屋大学附属病院薬剤部薬品管理室
ダイオキシン	名古屋市科学館 名古屋クリーンセンター南陽工場
動物実験	名古屋動物愛護センター
環境ホルモン汚染とその対策	名古屋大学環境医学研究所
名古屋大学難処理人工物研究センター	
胎教	飯田産婦人科
天気が人に与える影響	名古屋市科学館 名古屋地方気象台 日本気象協会東海支部
電磁波と私達	電波管理部調査課 フクダ電子名古屋販売
性格は何によって決まるか	祖母の家 名大教育学部心理学長峰研究室



サーフィンと海の世界	サーフボード製作所 赤羽根町役場建設課	サーフショップ
環境と心	中部森林管理局名古屋分局	
人間社会の権利と義務 ー平等・対等って何ー	名古屋市女性会館	名大情報文化学部共通教育室
古い建物と新しい建物	有松	有松まちづくりの会
飛行機の騒音	名古屋空港周辺	名古屋空港ビルディング株式会社
宇宙ステーションについて	各務ヶ原航空宇宙博物館 名古屋大学宇宙医学実験センター	
電車騒音	名古屋市役所交通公害係	名古屋市役所交通公害課
電車による公害 (騒音)	線路の近くに住んでいる人・お店 名古屋市環境科学研究所	
路面電車	名古屋市市電・地下鉄保存館	
今と昔の食生活	名古屋市博物館 愛知県総合試験場作物研究室環境研究室	
アクセサリーによる金属アレルギー	名古屋市消費生活センター 名古屋大学大幸センター環境皮膚科学	
水 ー水が起こす影響ー	家の近所の川 名古屋女子大学家政学部 名古屋市役所環境局公害対策課水質係	ミネラルウォーター販売

## 5 まとめと今後の課題

### (1) メインテーマから個々の研究テーマへ

学年に配当されたテーマである「生命と環境」を探索するにあたり、「見つめ直そうわたしたちの生活ー循環と共生を求めてー」というサブテーマを設定したことは、学習者である生徒自身が、具体的な探求の方向性を絞り込むにあたって大変有効であったと考える。特に、サブテーマの示す「身近な生活の中から環境問題を考える」というとらえ方、考え方。さらに「循環と共生」という人間が環境の中で生きる上で欠かすことのできない、しかも従来の環境意識ではなかなか見いだされにくかった視点を示してのテーマ設定は、一見抽象性を伴うものの、それがかえって生徒の視点の幅広さの確保に役立ったと思われる。

このことは、「4 個人テーマと主な訪問先」からも窺えるように、生徒自身が選択したテーマは、

- ・自然の生き物に関するもの
- ・化学物質に関するもの
- ・ゴミ問題
- ・リサイクル問題
- ・建築と健康の問題
- ・薬害の問題
- ・アレルギーなど健康の問題
- ・農薬の問題
- ・犯罪や人権の問題
- ・心理学に関する問題

などバラエティーに富んだものとなっていることでも

分かる。

また、研究の方法においても、インターネットの利用や図書館での調べ学習はもちろんであるが、関係機関への問い合わせやパンフレット・関連冊子を収集しての資料集め、さらにはみずから水質調査を試みたり、海岸に漂着するゴミを集める者、みずからの生活から出るゴミを丹念に分析し集計する者など、積極的な取り組みが目立っている。

ところで、藤前干潟の問題や海上の森の問題、そして中部国際空港建設の問題など、環境に関連した問題が連日マスコミをにぎわせている中、名古屋市のゴミ処理の大幅な規定変更があり、それに伴って名古屋大学におけるゴミ処理の方法も大幅に変化したことなど、生徒自身の「環境意識」の高まりが背景にあったことは事実である。その意味では、時宜を得たテーマであったといえよう。

### (2) 2回のフィールドワークについて

当該学年は、中学1年次には「生き方を探る」をテーマに、仲間の家庭を相互に訪ねたり、あこがれの職業に就いている人を訪ねたりというフィールドワークの体験がなく、抽象的なしかも広範なテーマからある一点を追求してさらに自己の生活に帰結するというような学習活動は初めてとあってよい。したがって、フィールドワークを夏休み中と11月の2回に分けて計画したのは、いかに説明する事柄を期待してのことである。

#### ①夏のフィールドワーク

夏のフィールドワークの目的は、プレ体験的な意義付けを持たせ、個人テーマについて身近に体験できる機会を活用して探求の方向性を探ると共に、探求方法の可能性を探らせることにある。したがって、取り立てていずこかにアポイントを取り、説明を聞いたりするということは求めず、家族旅行の折りに関連する施設を見学したり、身近な場所での観察や調査、あるいは近隣自治体の主催する体験教室に参加したりといった程度のものとした。具体的には、家族旅行を利用して諫早湾を訪れた生徒、海岸に漂着したゴミを集めたり観察した生徒、螢の観察会に参加した生徒、近所の交差点のゴミを観察した生徒など、思い思いの取り組みの中で、個々の研究内容の深化の手がかりをつかんでいったと考える。

この夏のフィールドワークの後、その発表会を実施した。その折には発表と質疑応答の中に、研究テーマの探求上でふさわしかったか、また、今後の探求にどのような方向性を見出したかなど、11月のフィールドワークへの発展と個人研究の深化を意識した内容にするようアドバイスした。

#### ②11月のフィールドワーク

夏のフィールドワークが個人テーマの確認とその探求方向の確認という意義があるとすれば、11月のフィールドワークは、個人テーマの追求する研究内容を裏付けし確立させるものとなる。この点、夏のフィールドワーク以降のレポート作成や発表の活動により、11月のフィールドワークでは、問題意識を明確にした訪問先の選択や調査が行えるようになった。

### (3) 学習活動上の問題点

学習者である生徒個々の興味関心から各自のテーマが生まれる以上、そのテーマが多岐にわたることは当然のことであり、そのニーズに応えつつ指導の体制を工夫したことは先に述べた。しかし、それだけではなかなか解決しない問題も生じてくる。

#### ①生徒のとらえるテーマから

生徒個々が興味関心を持ってテーマを設定する以上、最先端の問題、人権に関わる問題、企業や機関の機密に触れる問題なども生じてくる。

たとえば、「胎教とその後の成長や少年非行との関わり」などは、具体的な研究成果を身近な機関によって調査するような状況ではなく、また「医療ミス」などについて医療機関にフィールドワークや調査を試みても、門前払いにされてしまうのは当然である。

このような問題については、関連する類似の方向を例示したり、新たな視点を紹介したりとある程度

のてこ入れをせざるを得なかった。

#### ②フィールドワーク先開拓の必要性

本校がフィールドワークを開始した頃とは比較にならない数の学校がフィールドワークを実施している様子である。このことは、様々な事情を受け入れ先に生じさせ、受け入れ困難の姿勢を示される場合も少なくない。たとえば、

ア、多くの依頼に対応しきれないという理由で受け入れを断られる場合。

イ、以前に受け入れた他のフィールドワークの印象が悪かったことを理由に断られる場合。

ウ、同時期に複数の訪問依頼が殺到し、受け入れ側としても混乱してしまうという場合。

いずれにしても、受け入れ側の好意に頼り切ったフィールドワークであることは間違いなく、受け入れ側の協力に應えるだけの依頼側の対策が必要である。イの場合には、本校以外の取り組みによるものであったことが判明したが、他山の石として事前指導を徹底しなければならないと痛感した。他の場合についても、本校においては、比較的好意的に対応していただいていると実感すると共に、附属学校である事から、大学の研究室など、依頼しやすいという利点はあるものの、現実の訪問先を見ると、地方自治体の事業所や一般企業、個人など多岐にわたっており、校内での連絡調整はもちろん、将来的には、地域の関係学校や機関が連絡調整し合う機会が必要になることが予想されるなど、校内だけの問題としてだけではとらえきれない事態が迫っているものと思われる。

#### ③他教科等との連携について

総合人間科以外の学習活動との連携については、コンピュータ利用に関わる情報教育や、依頼状・お礼状の作成といった国語表現の時間、あるいは遠足や林間学校、学校祭といった行事をもとらえて連携させ活用するよう工夫したが、現実には学年担当教官の関わる教科や行事に留まり、真の意味での連携とまでは至っていない。この点については、新カリキュラム実施に合わせて現在作業中であり、今後の進展を期待したい。

(三島 徹)